

【企画】

座談会：新たなキャリア形成をめぐって

参加者：林さと子（津田塾大学） 元大養協理事  
岡本能里子（東京国際大学） 大養協監事  
三枝優子（文教大学） 大養協理事  
司会：山本忠行（創価大学） 大養協代表理事  
※ 所属は座談会当時のもの

開催日時：2019年1月12日（土）

会場：津田塾大学1号館

はじめに

日本語教育および日本語教員養成は大きな転換点を迎えようとしています。昨年12月8日に「出入国管理及び難民認定法」が改正されました。これは今後の日本にとって大きな転換点となると言われていています。少子高齢化問題が深刻化しつつある日本は、その解決策として外国人を受け入れることにしたわけです。受け入れた外国人と共にこの日本社会を支えていくときには、コミュニケーションが重要になります。その成否を左右するのが日本語教育であることは明らかです。12月25日に法務省が発表した「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策（確定版）」でも日本語教育が重視されていることがわかります。

この「受入れ・共生」のカギを握るのが日本語教育であるとすれば、外国人に日本語を教えることは、これからの社会を築く行為であり、さらには未来を創ることにつながるわけです。日本語教員養成関係者は、こうした歴史を創る側としての自覚を持つと同時に、日本語教員養成課程で学ぶ学生の意識変革を促し、多言語・多文化共生社会を築いていく力として社会に送り出していかなければなりません。それは養成課程修了者のキャリア・パスの問題が重要な意味を持つことを意味します。

昨年10月13日に開催した秋季大会では「日本語教員養成課程における新たな就活・キャリア形成とは」と題してシンポジウムを行いました。異なる立場で日本語教育に関わっている方にも話をしていただき、日本語教育の多様性を再確認することができました。

この座談会は昨秋のシンポジウムの内容を補う意味を込めて、長年にわたって日本語教員養成に携わり、大養協理事経験者の林さと子先生と岡本能里子先生、教え子を登壇させてくださった三枝優子先生に集まっていただき、日本語教員のキャリアをめぐって、多角的に論じてもらったものです。日本語教員養成課程を担当している先生方にとって、参考になれば幸いです。

1. 日本語教員のキャリア・パスをめぐって

司会：皆さん正月早々、雪も降りそうな中をお集まりいただき、ありがとうございます。

昨年の秋季大会では「新たな就活・キャリア形成とは」と題してシンポジウムを行いました。時期的に、多くの学会が集中する時期でしたから、どれぐらいの人が来てくれるかと思いましたが、蓋を開けてみると、ほぼ満席状態となり、日本語教育関係者がキャリア問題に強い関心を抱いていることが浮かび上がりました。

まず、確認しておきたいのは、他の教職課程と比べて、日本語教員養成課程でキャリア形成が問題になることが多い理由です。秋季大会の感想を含めて、語っていただければと思います。

林：実は秋季大会に全部は参加できませんでした。申し訳ありません。キャリア形成が他の教職課程と比べて問題になるというのは、根っこにあるのは、本来的な教育機関ではないところが多い、ということかなと思うんですね。一般の教職課程は「日本人」を対象とする公教育という場が全国にあるので、当然のことながら仕事もたくさんある。一方、日本語教育はそうではない。ある種の日本語教育機関は、日本語を教えることをビジネスとしている。見えにくいかもしれないですけど。

つまり、「外国人」対象なので、圧倒的に数が少ないところで、なおかつ本来的な教育機関じゃない。企業的なものもあるので、キャリアとして正式に成立するのが難しいというのがあるのかもしれないですね。

司会：私も、1980年に国立国語研究所で日本語教育長期専門研修を受けるときには、仕事はないと思ってくださいと言われました。

岡本先生は、日本語教育がやや拡大期に入ってから、この世界に入られたそうですけど、どういう自分のキャリアを想定していらっしゃったのでしょうか。

岡本：私は英文学科だったので、英語の教員になりたかったんです。英語が好きで、英語を使うと世界が広がる、いろんな人とつながれるというのがあって、英語の先生になりたかったんだけど、けがしたりして教職が取れなくて、あきらめざるをえない状況がありました。

それで、どうしようかなと思ってたら、外国語としての日本語教育というのがあるとわかって専門を変えて、日本語教育に進むことにしたんです。ちょうど必要とされてきている時期だったので、面接の時も「日本語教員になって、それをライフワークにしたいので」と、ちゃんと言ってたんです。

司会：それはすばらしいですね。

岡本：日本語教育はキャリアとして必要になってくる職だから、大学院は絶対行った方がいいって、ある先生に勧められました。先生が必要っていう感じだったから、全然疑問がなく。日本語教員になることを楽しみに大学院の勉強を深めました。

林：私は山本先生と近い世代で、同じ頃に国語研究所の研修を受けていて、まったく先が見えない時代だったので、時代によって違うんだなと思います。

司会：三枝先生は軌道に乗ったのに行き詰まりかけた、微妙な時期に。

三枝：バブルがはじけて、就職氷河期に突入する時期だったので、日本語教員だけでなく、4年生全体が「就職どうしよう、就職できるかな」という雰囲気の中で動いてました。だから、日本語学校に就職できなかったとしても、ほかの学生も思うように企業に就職

できなくて、フリーターっていう言葉も出てきた時代でした。かなりの同期の学生が海外へ出て行ったんですけど、今の学生ほど壁がないっていうか、そこしか道がないんだったら、行こうっていうところと、バブルの余韻なのか、そうは言ってもどうにかなるだろうみたいなところもたぶんあったと思います。今の学生を見ていると、私たちよりも堅実な生き方を探しているというか、絶対に道を外れない、年金のことまで考えて仕事を選ぶような雰囲気があるんです。自分の時は、10年後、20年後にどうしようというのは考えていなかった気がします。

海外に行く同期がおおぜいいる中で、すぐに海外に行くというのが怖かったということもあって、大学院に入ってもう少し勉強したり、実践を積んだりしてからというようなことで、ここにたどり着いているっていう感じですかね。

司会：日本語教員のキャリアと言っても、時期によってずいぶん雰囲気が変わるということがわかります。

大養協として昨年末に1か月余りにわたって行った日本語教員の待遇調査の結果の概要がまとまったということで、皆さんにも見ていただきましたが、待遇が悪いと言われる日本語教員ですが、実際に低賃金で働いている人がかなりいるということ、日本語をたくさん教えている人ほど収入が少ない、つまり現場の日本語教師は給料が安い、大学の教員とか養成課程を担当している人ほど収入が高いという実態が浮かび上がってきたようです。この実態調査の結果を見て思うところはありましたでしょうか。

三枝：これをきっかけにというわけではないんですが、何人か卒業生に聞いてみたりもしたんですけど、就職する前の条件を見たときの印象としては、そんなに悪くないって話をしてたんですね。ほかの会社に入っても、手取りとしては同じぐらいだから。実際どうだったと聞いてみたら、「残業」という名のない残業、学校で何時までというのはあるんだけど、家に帰ってから添削だったり、教案作ったりという、長い時間を使っていると考えると、やっぱりきつい。あとは実家暮らしだったらどうにかなるんだけど、東京で一人暮らしとなると大変だという声も聞こえます。なかなかきびしいんだなという印象でした。

林：ほかと比べて、そんなに違わない。だったら、やりたいことをやったほうが良いと言ってやってみますという人がいます。津田塾は副専攻なので、就職に関しては日本語学校に絞り込んでこなかったんですね。で、比較的いい企業に入っていく人たちに日本語学校に進みなさいと言うよりも、いろんなことやって、またやりたくなったら、やったらどうっていう形で話します。

状況が悪いというのはずっと言われてきたことですが、最近は若い人たちの専任職がちょっと増えてますよね。統計にあるのは違う時代に入った人の結果なので、今の状況がどうなのか、全体のどの部分を切り取ったデータなのかがちょっとわからないところがあります。ここ数年、若い人が専任で採用されるというように、変わってきた。

司会：待遇が改善されてきたことは間違いないかもしれませんね。

林：改善なのか、空気が変わったのか、わかりませんが。以前は、何年か経験がないと採ってもらえなかったし、その割に仕事がきつかったりして。もともとそんなに甘

くはないと思っているので、とりあえず、専任で入ってみようという感じでしょうか。

バブル崩壊後の人たちは、夢を見てというよりも、自分のやりたいことを身近なところでやってみる。何年かしてから勉強してもいいという感じで。そのまま大学院に進むより、仕事をしてみて、テーマが見つかったら、大学院もいいかなって。どの企業に行っても、テーマが見つかったときに、勉強するというサイクルを想定しているのかなって思います。

岡本：難しいなって思うのは、日本語教育の場合、当然女性が多いんですよ。女性が多いんだけど、収入はと言うと平均的に男性の方が上になるっていう。役職に就いているとか、何か決めるところはやっぱり男性になっていますよね。大学でもセンター長とか。日本語教育学会も会員が4000人もいると言っても、ふつうの学会と違って、子育てが終わった方とか、いろいろな人が入ってらっしゃいますよね。女性の方は自分のライフステージに合わせて選べるみたいなのところもあるので、その点をどう考えればいいのか。それで搾取されてるんだったらよくない。新卒の、これから生活していこうという人にとって、特に女性にとって、これだけ差が明確に表れていますよね。412万円と297万円でしょう。この違いは何？

それに今回の調査は年齢層が40代、50代が多いでしょう。さっき林先生がおっしゃったみたいに、今の若い人、仕事を始めたばかり人の声なんかも、もうちょっと入った方がいいのかなという気がします。

林：日本語教育機関と言っても、設立の形態が学校教育系と株式会社系で収入その他がどのぐらいなのかが、それが知りいですね。企業的な面だけで日本語教育をやっていくと搾取も生じかねない。若いときから専任でいいよって言われるのは、安く使われるかもしれないので、「就職試験は相手に選ばれるだけと思わないで、自分が働きたい場所かどうかを見極めるというか、きちんと情報を得て、ちゃんと見てきなさいね。自分の主専攻の仕事をしてもいいんだから」、と言ってます。

きっと主専攻で、日本語学校で日本語を教えることを狙ってやっている学生さんにとっては、この状況はきびしくみえるだろうかと改めて思います。主専攻の学生さんの就職に対するアプローチは違いますか。

三枝：だいぶ違います。副専攻の学生で日本語学校に就職する学生は、ほとんどいないんじゃないかな。こちらが把握してないだけっていうのもあるかもしれませんが。

林：主専攻中心に把握していらっしゃる。

三枝：主専攻だと、ゼミも多くは日本語教育ゼミに入っているし、実習などでもよく顔を合わせます。でも、副専攻だと、大きなクラスの授業になるので、こちらも個々の状況を把握していないから、よくわからないんです。文教の場合、日本語教育機関で働いている先輩が多いので、年に一回日本語教師就職説明会というわけではないんですが、卒業した先輩がこんなことしてますよって話しに来る会があります。今までは海外が中心で、海外でこんな生活で、こんなお給料で、こんな授業してますよって報告だったんですが、そこに2、3年前から国内も入るようになってきました。そこで刺激を受けて、話しを聞きに行く。求人募集の張り紙もほとんど先輩たちの学校なんです。

林：信頼関係があるところに行くので、そこは違うかもしれない。

三枝：こちらもなるべくそういうところだと。しかし、先生もおっしゃったように、一つだけ見て決めないで、いろいろ見てみると自分がやりたいのが見えてくるよ、というところは気をつけているんですけど。

司会：シンポジウムでは、アークアカデミーの前澤先生から、日本語を教えるだけでなく、いろんなことができなきゃいけないという話もあったんですけど、養成課程としてできることは何かありますか。

三枝：話を聞くと、幅広いですよ。生活の相談であったり、進学相談であったりというところは、なかなか学校の授業ではできない部分かなとは思ってますけど。

林：22歳じゃ、つらいですよ。

司会：行政書士の小松原さんにも話していただきましたが、日本語教育を一つのステップにしながらか、ほかの分野に進出していく人もいます。そういう学生に対する方向付けというか、アドバイスというのはどのようにやっていますか。

林：小松原さんみたいなタイプの方が日本語教員養成課程からどんどん出るとするのは、今後の社会で求められると思います。自分の学生ではないんですけど、子どもの日本語教育をしていて、日本に来るとか出て行くとか移動に関わるようになり、行政書士という仕事に移った人を知っています。

修了生でおもしろいケースとしては、いくつか海外の学校を経験して、入管職員になった人がいます。それはまず海外の経験をやってみようということで、自分で海外に履歴書を送り、海外を回ってきて、今度は安定職に就きたいと言って、関連のあるところというので、国家公務員の試験を受けたようです。

うちは副専攻なので、自分が主専攻で学んだこととあわせて、関連のあるところに進んだ人では、大学の職員になって留学生の世話をするとか、市役所の職員になって、国際課とか、国際交流関係の部署で働く人もいます。ただ、すぐにそういう部署に配属されるわけではありませんが、市役所の中で国際化推進みたいなことをやりたいという。

日本語が必要な人が日本で暮らすときに関連する仕事、行政書士などもそうですが、こういう話を聞いて、日本語教育のキャリアの一つに入れていくって人もいます。

司会：岡本先生のところもいろいろなところへ進んでいるんじゃないですか。

岡本：そうですね、海外青年協力隊に行くと、JICAの嘱託をやったあと、市役所へというケースがあります。協力隊で行ったところが、モザンビークだったので、ポルトガル語なんですよ。栃木だったかな、外国人が増えてということで。大学の国際交流課みたいなところは、みんな応募したりしてます。

それからもう一つは、外国人が多いIT企業ですね。最初は日本語学校の先生をしてたんですけど、結婚するからもうちょっと安定したところがいいと言って。もともとITが得意だったからというものもありますけど。そこに入ったらけっこう外国人が多かったんです。上司から外国人はなかなか言うこと聞かないし、時間を守らないとかと言われたんですけど、話が通じてないみたいだったので、伝えてあげたら、なんでそんなにいろんな言語できるのと言われたと言うんです。しかし、そうじゃなくて、日本語教育やっ

てたから、やさしい日本語で話せるし、言おうとしていることもわかる。それで社員の間をどんどんつないで、すごく評価を受けたみたいです。

## 2. 日本語教員養成課程の現状について

司会：これから異言語・異文化の人をどうつないでいくかは重要な課題だと思うんですけども、一方では日本語教員養成課程というと、何人教員になっているんだということが成果として問われる。問われた結果、あまり教員として就職していないとなると、それが学部学科の統廃合で、廃止になったところ、縮小されたところなんかもあるわけです。これは残念なことだと思います。これについて一言ご意見をいただきたいんですが。

林：主専攻じゃなくて、ある種幸いだったかもしれないのは、自分の専攻とあわせて、何ができるかを考えるからです。英語教員を目指す学生で日本語もやる人は、外国につながる子どもの教育をやる。今では文科省がプラスに評価すると言ってますけれども、以前からそういう可能性があるよということをやっていたので、就職に不安がある人は学校教育の中で職を得る。そこに日本語教育の知識があることで、ちょっと違う視点を持って、教育に当たれるということを、大学にも訴えます。日本語学校に就職するだけが日本語教員養成課程ではない、広く教養としてやっていますと。

司会：学校側にしっかりと理解してもらおう努力は大切ですね。

林：学校によっては20人ぐらいに限定して課程に登録するというようなことをやっていますが、それはやらないで、所定の単位を取ったら修了するというシステムにしていたので、課程を修了する人と、ちょっとだけやる人がいます。割に緩やかな課程で、取り終えた人はそれなりに学んだことを生かせるっていうことを、教授会等で大学に繰り返し説明する努力をしました。それを説明する報告書を3冊作ったんです。

5年目に「設立の経緯と展開」という報告書を作りました。ゼロからプログラム作って、5年ぐらい経ったときに、一人でやっているの、何かあったときのことを考え、記録を残しておこうという気持ちがありました。これは作った当初から5年間ある程度カリキュラムが落ち着くまでの卒業生を、けっこう密に追いかけたものです。

専任は私一人で何らかの形で伝えないと理解してもらえない。維持していくために何が必要なのかを見極めるのに、いっしょに協力して作ってくださる方にもいっしょに考えていただいて、それを報告書に載せました。これには杉戸先生の、外国語としての日本語についてというのがあるんです。非常勤をお辞めになるときに、卒業論文ですと、「もう一つの日本語教育として」という原稿を書いてくださったんです。外国人が使う日本語を受容する日本人を育てる意味を書いてくださってます。

司会：外国人が増えれば、変な日本語を使っても、それを受け入れる寛容な社会にしていかなければなりませんからね。

林：それから15年ぐらい一生懸命にやって、20周年に修了生対象のアンケート調査をやりました。数字としては日本語学校にそのまま就職した人はあまりいません。今みたいに若い人がすぐには仕事に就けないし、しかも副専攻ですから。日本語教育系に残った人は、数は少ないけれど、大学院に進んで専門家になった人です。それだけだと、「え、

これだけ」って言われそうなので、どういう職に就いていて、どういうときに学んだことを思い出すか、どこで役に立っていると思うかというような形で、課程で学んだことが今の仕事や生活にどうつながっているかっていうのを調査し、報告書に入れました。教員養成の科目を担当の先生方も教えつつ、いろいろ発見していらっしゃるので、どういふふうに考えて関わっているかという声をまとめました。さらに、修了生のネットワークを作っているので、修了してからの様子を載せました。企業の中で外国人が比較的多い仕事に就く人も多い学校なので、そこでつなぐ役割をしているとか、家庭内で、つまり国際結婚もあるとか、外国との接点が多いことがわかる情報を入れました。これから迎える状況の中で、そういう経験を生かしていけるような形に意識してやってきたというのを見える形にしたんです。ここには修了生の数とか、教職を履修した人の数とか、学校の事務局の協力も得てまとめました。次の世代にバトンを渡さなきゃいけない時期に来ているし、いっぺんには伝えきれないので、文字に残しておこうと思ったんです。

最後の一冊は25周年の記念シンポジウムの報告書で、その時のテーマは「多文化社会で日本語教育ができること」でした。卒業生その他関係者を見ていて、日本語教育はこういう広がりの中でやれますよというのを示すために、留学生、子ども、地域・ボランティア、自治体、ビジネス、企業、看護・介護、難民・移民、海外の日本語教育というテーマでラウンドテーブルを設け、大学にもそういう領域であるということを伝えようとしました。私はここで退くという段階に来ていますが、これが残っていくといいなと思っています。

司会：すばらしい努力だと思います。いろいろ参考になることも多いんじゃないでしょうか。岡本先生も副専攻でいろいろご苦労されていると思いますけど。

岡本：うちは途中まで副専攻ですが、52単位あり、レベルとしては主専攻レベルだったんです。最初はそういうふうにしたにもかかわらず、今は、英語による授業を推進していて、英語で入った学部留学生以外は日本語も必修じゃなくなったんです。そういうこともあって、今年の一年生から養成課程が取れなくなりました。

最初の理念があまり理解されなくなってしまったというのが、すごく歯がゆいところです。林先生のところは日本語教育のキャリア・パスをよく追っていらっしゃるけれども、私のところは個人で追っているみたいな感じになってしまっています。後で日本語教員になっている人もいて、国内外のいろんなところに行っているんだけど、大学がそれを把握していないので、日本語の先生にどれだけなっているんですか、という見方になってしまいました。英語の教員免許も養成課程を開設した私が所属している国際関係学部と言語コミュニケーション学部で取れたんですけど、言語コミュニケーションの方に統合しようみたいになって、国際関係学部では他学部履修でないと、英語の免許は取れなくなったんです。そういう点は残念です。

この『大学における海外体験学習への挑戦』（2017）は、短期留学でモンゴルなどへ行った学生たちのキャリアに関するものを入れたんですけど、その中で日本語教育を学んだ人かなりいます。海外青年協力隊の日本語教員になった人もいます。中学・高校の英語、社会の教員になった人もいますが、特に英語の教員は日本語教育を学んだのが、

すごく役立ったと言っていました。社会科の教員も、国際関係は、政治、経済、社会・文化の3領域からアプローチする必要があることを学び、国境を越えての労働力移動といった政治経済とのつながりでヨーロッパの言語評価共通参照枠(CEFR)もちゃんと教えるので理解できます。

外国語教育の教員免許は、今は英語が中心だけれども、それが中国語になるかもしれないという観点も持てる。外国の子どもたちが大学近辺の小中学校に増えてきている、何でネパールの人たちが入って来るのかとか、国際関係学を学んで教員免許をとった卒業生はわかる。もともと、海外で国際支援が担える人材を育成するための日本語教員養成として設立されたから、国際関係学をベースにした日本語教員養成課程での学びが役に立っていると言ってくれます。

国際関係の鉄則は2国間で見ちゃだめだということなんです。韓国と日本を見るときにも、日本と中国とロシアとアメリカとかね、複数国の関係の中で見なきゃいけない、歴史的な国際関係を見なきゃいけないというのを国際関係学の授業で身につけているんです。日本語教員養成課程の中にそういう科目を入れていたので、そこは役立っているんじゃないかと思います。学生からもそういうコメントがたくさん来ます。

フィールド・スタディでモンゴルとか、パプアニューギニアとかに行った学生たちは、就職面接の時にそのことを聞かれるらしいです。うちはJTBとも連携していて観光のところも人気なんですけど、それと併せて取っている学生は旅行社の就職率がたいへん高いんです。

林：大学として日本語教員養成課程は、どの学部の学生にも役立つというのをもっとアピールして復活した方がいいんじゃないですか。

岡本：その点をアピールしたいんですけど。これだけ必要になっているのに。

林：そういう意味では、今の世の中ではあれだけ新聞の一面に日本語教育の文字が躍るのは、危うい面が裏にあると思うけれども、みんなに理解してもらうにはいいかも。

一人でやるのは大変ですけど、小さい学校なので、全学科に提供しているっていう意味が見えやすい。今までひとつのキャンパスだったので、みんなに関係がありますよと言う場がありました。

中には情報とか数学の先生を目指す学生もいますが、文系の科目がない中で日本語教育をとると、大変なんです。面白いのは、数学というのは、日本語を3行ぐらい書いて、あとは数式なので、日本語だけで4000字ぐらいのレポートを書くのに、3行ごとに改行しちゃうみたいな、理系の人の頭をしてる。それはたいへんなんだけど、そういう人たちがいたので、全学科の人がやる意味が伝わる。

岡本先生の話の話を聞くと国際関係だけで全部に関わるから、そのリソースを集めた日本語教育をやると、これからの日本社会のあらゆる面で、それを生かした人材が育ちますっていうのもいいんじゃないですかね。

岡本：子どもたちを支援するボランティアが増えてますが、今、それを週に3回ずつぐらい2つの小学校でやっています。きのうも「1月はいつぐらいから来てもらえますか」と小学校から聞かれました。外国籍の子ども、特にネパールの子が増えていますが、大



学周辺にはネパールのコミュニティもあるんです。ネパールの留学生がいるから、ネパールの留学生と日本人学生がセットで小学校に行って、アレルギーとか宗教的な理由から給食で食べられないものをチェックしたり、連絡帳をネパール語に翻訳したりするんです。それを川越市で共有していいですかと言われたんですが、ちゃんとしたネパール語になっているか、間違えていないか心配なんです。それで、お父さんがネパール人、お母さんが日本人というトライリンガルの学生にも入ってもらっています。

林：そういうのを大学が把握したら、日本語教員養成課程はやっぱり必要なんじゃないでしょうか

岡本：と思うんだけどね。

林：複言語化しないと、どうにもならない状況がある。学生には第二外国語が単位科目ではなくて、複言語のひとつということを示すために、教授法の文法説明書は、『みんなの日本語』だったら、自分の二外のを勧めて、スペイン語とか中国語とかを買わせて、日本語を外国語で説明するところなるのかっていうのをやる。そうすると、頑張る学生は、日本語文法の説明を二外で読んでわからなくても、例文はわかりますよね。そこから二外のほうをもうちょっと頑張ろうという気持ちになる。

複言語政策を考えて、「単位取れるかどうかは知らないけど、頑張りなさい」と言うんです。学生は役に立つと思うと、意外に頑張るんですよね。単位を取るだけじゃなくて、もっと役に立つ面があるよということを実感するように持っていければいい。日本語もいっしょに、一人の頭の中にヨーロッパ的な複言語を考えられるといいなと思います。

岡本：言語コミュニケーション学部と国際関係学部と両方で授業を持っている英語の非常勤の先生がいるんですけど、議論する内容が違うと言うんです。国際関係の場合は国際的なことをするとか、関係を結ぶという意味で英語を使うことになっているので、レポートを書かせると、今の国際的な 이슈が出てくるんですけど、言語コミュニケーションではそれがあまり出てこないらしいんですよ。

林：国際関係について学ぶことは大切ですよ。

岡本：大学院の面接を言語コミュニケーションの先生といっしょにやるんですけど、びっくりされるんですよ。国際関係の学生は話すことがすごく違うと。英語の先生になる人は、まず日本語のことをわかって、日本語と比較しながら教えるのが大事です。さらに英語をやる意味とか、複言語のこととかも必要。

司会：三枝先生のところは、学校の中での地位、位置づけはいかがでしょう。

三枝：文教大学文学部は学科が4学科、英米語英米文学科と日本語日本文学科と中国語中国文学科と外国語学科がありますが、外国語学科は英語+1ができるようにというものです。英米語英米文学科は英語学や英文学中心で、外国語学科のほうは英語を使って何か活動を楽しみましょう、プラス1言語勉強しましょうという、2年前にできたところなんです。日本語教育はこの4学科の学生が、入学後に選択、登録して取れるコースになっています。

成果の面で言うと、文教大は教員養成というのが中心にあるんです。教育学部がある

ので、そこがメインではあるんですけど。教育学部は小学校の免許で、中高の教員養成は文学部という形なので、外国語学科を除いて、5, 6割の学生は教職を取ります。

全員：それはすごいですね。

三枝：教授会とかでも、教員に何人になりました、1次合格者何人、2次合格者何人と細かく報告があるんですけど、そこに日本語教員は含まれていないので・・・

林：幸い？

三枝：幸いというのでしょうか。日本語教員こんなに登録しているのに、あまりなっていないねという声は出てこない。

林：教員になる人が副専攻で取っているのはどれぐらいの割合に？

三枝：探したんですけど、副専攻で取っている割合がちょっと見えなくて、感覚的に言うと、主専攻で毎年30人ぐらい登録しているんですけど、半分ぐらいは学校教員の免許も取っていると思います。

林：そこは売りじゃないですか。

三枝：教員採用試験を受けに行くと面接がありますよね。大学で何やったというときに、日本語教育実習でこんなことやりましたっていうと、興味を持って話を聞いてくれる。

林：反応いいんですね、今。

三枝：この話をもう少し広めたらいいだろうなどは。

林：教職課程だけじゃなくて、日本語もと言う学生がこれぐらいいて、教員の採用で得をしている可能性があるって。文科省の、あのお達はいつでしたっけ。

司会：2017年1月です。

林：日本語教育や国際理解教育を学んだ人は採用の時に考慮するとか、特別選考するとか。

三枝：それもすごく追い風になっていると思います。でも、成果という面ではそこまで言われていない。

林：意外ですね。数をすごく言われるのかと思った。

三枝：そうでもないですね。

司会：よそはそれを言われて、肩身の狭い思いをしている人も。

三枝：日本語教育学科のように独立した専攻じゃないというところがあるのだと思います。

また、先ほどいったように教職とダブルで取っている人も多いので、教員としてのプラスアルファにもなりますよね。日本語教員にどれだけなったかというのは、学校がどれだけ把握しているのかは、ちょっとわからなくて。日本語教育研究室の方ではなるべく把握するようにはしていますけど、副専攻の学生が何も相談なしに就職したら、その数は私たちにはわからない。きっといるかもしれませんが。

キャリアという面では日本語教員を2, 3年やったあと、教員採用試験を受けて教員になるという人も多いですし。

林：卒業時だけじゃわかんないですね。10年ぐらいは追っかけないと。

司会：それが難しさですね。

岡本：今は個人情報保護というのがあるから、ほかのところの開示してもらえないんですよね。この本を作るときにもたいへんでした。

司会：卒業時に何人日本語教員になったかという、えらく少ないんだけど、しばらくしてから日本語教育に携わる人がいますからね。

岡本：その調査というのは、大事だと思います。

林：卒業時だけの勝負じゃなくて、何年後かにどういうふうになっているかを学校が把握していないと。学校卒業時に 22 歳で、大人の日本語学校生に教えるというのはなかなかたいへんですよね。

岡本：この本を出したときも、JASSO が留学した効果を見たかったんです。留学がキャリアにどう生かされているか、学生たちはそのときにはわからない。卒業して何年かして、あのときのこれがというのがわかってくるので、学んだことがキャリアにどう生かされているか、卒業生を継続的に調査することが必要だなと思います。

林：副専攻やって、大学院に行って、非常勤やったださっている人が、修了生としてネットワークの管理をしてくださっている。インタラクティブじゃないですけど、こういうのやっていますというような情報を常時送っていると、何か声をかけたときに修了生が反応してくれるようです。こういうネットワークが効いているのかなという気がする。

岡本：前と違って SNS でつながりやすいので、ネットワークでしっかりやっていくというのはいいですね。

林：インタラクティブにすると、だれかそれにずっと付き合う人が必要になるので、なかなか大変。情報送信だけで、何か必要なときは、ここに返事みたいな形のネットワークがあるといいのかな。

岡本：JASSO でさえ、卒業生のキャリア・パスを追いたいけれども、そういうのは難しいから、やってと言われて、さきほどの本でやりました。お金を出す価値があるのか、それがどういうふうに日本の社会の発展に生かされているのかを知りたいからというようなことだったんですね。たまたま横田雅弘先生が座長でいっしょに送り出し、受入れの委員をやったので、この調査もいっしょにやったんですけど、こういう調査は卒業生に協力してもらって、5 年後、10 年後と続けてやらなきゃいけないと思いました。

林：外国人の急激な受入れは危ういけれど、社会的なシステムの構築の必要性を感じていて、投資の必要があると思う人が出てくれば、情報が把握しやすくなるのかもしれない。

### 3. 大きな転換期にある日本語教育の世界

司会：毎年文化庁が開催している日本語教育大会ですが、昨年のテーマは「激動！日本語教育～人材が変わる，教育が変わる，学習者が輝く～」でした。ここでは「激動」「変わる」という言葉が目を引きます。3 月には「日本語教育人材の養成・研修の在り方について」と題する報告書がまとめられました。6 月には「骨太の改革方針」が示され、12 月には入管法改正が行われ、さらに 12 月 25 日には法務省から「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策」の確定版が公開されました。超党派で何年も議論されてきた「日本語教育推進基本法」も近いうちに制定されるだろうと見込まれています。こうした状況の中、日本語教育の観点から基本的なことを確認しておきたいと思います。みなさん、どういうふうに捉えていらっしゃるのでしょうか。

岡本：4月から新しい入管法が実施されるのに、外国人を「人」として受け入れられるような法案にきちんとなっていない。日本語教育の在り方も、これからやっていくみたいなのふうになっていますよね。まず、日本語教育推進基本法も、なぜこの法律が必要なのか、明治とか戦後ぐらいの大きな変化になるんだというのが、国民にわかるような形で説明しないとイケない。選ばれない国になってしまったら、次の世代が本当に困る。

枠組みだけ作ろうとしていますよね。入管法はもう4月から施行されるので、その間に、あるいは継続して自分たちが具体的なことをどう発信できるかというのが大事だし、一般の人が自分の問題として捉えられるような形でもう少し社会啓発するっていうのが、大事だと思います。

外国人材受入れとグローバル人材と両方ありますよね。グローバル人材という定義の中に語学力とか異文化に対する理解とか、日本人のアイデンティティみたいなのが入っているわけです。そういうところと日本語教育ってすごく連動しているというのを、もう少し学生にわからせたり、一般の人にも身近な問題としてわかるような発信をしないとイケないんじゃないかと強く思います。

労働力のことばかり言ってるから、職場のことと思っちゃうんじゃないかな。だけど、そうじゃないですよ。そこがちょっとまだ弱い。自分たちの問題という意識が弱い。政策だけじゃなくて、受入れ側のコミュニケーション問題を考えなきゃいけない。来る外国人の日本語能力をN3にするのか、N4にするのかといった問題じゃなくて。みんなが外国人と「やさしい日本語」でコミュニケーションできるようにするには、小学校のときからやるべきだし、学校の言語教育と日本語教育をつなげられないかなと思っているところです。

三枝：このところ、いろんなことが一気に起きていて、メディアでもよく取り上げられていると思うんですけど、じゃ、3年生の授業で「12月にこういうのあったよね」と言ったら、半分ぐらいは「へえー」みたいな感じでした。こっちは注目して見てるからこんなにも思っているけれども、日本語教育専攻の学生であっても、あまり関心を持たずに生活している。岡本先生がおっしゃったように、自分の生活にどう影響するのかというところを、問いかけながら想像させていかなきゃいけないんだなと思いました。自分の中でも社会との関わりをもう一度強く認識し、考えるきっかけになりました。

#### 4. 日本語教育ができること

司会：今年の4月からは特定技能ということで外国人労働者が増えると言われています。有名なマックス・フリッシュの言葉として「我々は労働力と呼んだが、やってきたのは人間だった」というのがあるわけです。日本社会の変革ということなしに、大勢の外国人がやってくれば、当然ながらそこには何らかの摩擦やトラブルが起きると思われれます。そういうときに日本語教育が果たすべき使命は大きいんじゃないでしょうか。学生に対する指導も含めて、課程としてどうやっていけばよいか、一言アドバイスをいただけませんか。

林：受け入れる姿勢、構えみたいなの、日本人学生にどこまで伝えられるか。日本語教

育というと「日本語を教える」ことだと思って始める学生に、その前に考えるべきことがあるよねと、いっしょに考えていく。

うちの国際関係の学生は、さすがに去年の夏あたりからそういう外国人材受け入れのニュースが増えたと言います。夏休みに自由研究のようなものとして、日本語教育に関連することを自分のテーマとして発見する「日本語教育発見ノート」みたいなもの、新聞の切り抜きでもいいし、どこかインターンに行ってもいいし、何でもいいのでという宿題を出すんですよ。その中にこの受入れ問題がたくさん出てきています。

自分の専攻と併せてやっている学生の場合は、その目で日本語教育を見ていける。そういうのが割に伝えやすいところにいるので、言葉への興味を持っている人も、社会との関わりで見るということができます。副専攻でいろいろな専攻の人がいっしょにやることの意味があるような気がしました。

実は日本語教育大会の、この「激動」、たしかに急に増えるんだけど、実はこの議論は1990年の入管法改正のときから始まっている。日本の都合で外国人を受け入れて、激動を招いている。「激動」も気になるんですけど、「人材」が気になったんですね。「人」として入れるよりも、人材というのはすでに使う姿勢があるような気がして。「学習者が輝く」、本当に？もちろん目の前にいる人には、輝いた生活ができるようにと願いますけれども、その構えとかシステムが整わないままにたくさん入れて、「激動」。このテーマはどうなんだろうと思いました。でも世の中がそう動いている。私もこの資料を大学の関係者に配って、こういうふうに動いていますよと言いました。内実は日本の都合でそういうふうになっているだけで、受入れ対策は多少各省庁がやっているというのがこの大会で示されはしたけれども、机上の方策で、具体的になっていない。結果としては労働力対策という感じが抜けなくて。輝かなくても、安心して暮らせるぐらいは必要。

この機を捉えて日本語教育を拡大するみたいな方向は、ちょっと無理してる気がします。来てもらって、都合よく帰ってもらうというんじゃないいけない。日本語教育が社会に本当の意味で貢献できるものであると言えるようになったらいいなど。

大きく言うと、社会の構成員が変わっていくわけで、「日本人」だけが中心だった社会に「異物」が入ってくる感覚がある。国籍云々というよりも、社会を構成する人は明らかに変わってきていて、今後も変わっていく。日本語教育の人は教室の中で自分だけが日本人で、あとは外国人というような生活に慣れていて、背景がさまざまな人が暮らすような社会になったときに、少しそういうのに慣れていて、そういう経験を積んでいる日本語教育の人は、多くの面で貢献できるということをちゃんと伝える。

司会：大事な点ですね。これから外国人と共に安心・安全な社会を作っていく、支えていく時代になるかと思います。さきほどあったグローバル人材というと、どうしても英語ができる人みたいなイメージがあるわけですけど、特に英語専門に勉強している人は英語のことしか考えない。そういう中で国際関係のことを知り、日本語教育を学んだ人たちというのは大きく社会を変えていく力になるんじゃないかと期待しています。

卒業生のキャリアを『かけ橋の石ずえ：日本語教師のライフヒストリー』という本にまとめられた三枝先生はいかがでしょうか。

三枝：2012年に大学から出した本で、近藤功先生の退職記念という意味合いが強い本だったので、日本語教育にどう貢献できるかという趣旨の本ではないんですが、読み直してみると、キャリア・パスという点から見て、いろいろ面白い読み方ができるなと思いました。退職された先生を入れて、うちの大学を卒業した12名の日本語教員、続けていない人もいたので経験者も含まれていますが、どんなきっかけで、どのような日本語教師としての生活をしてきたかという内容になっています。

7年経つのでその後のことも考えながら見ていくと、私と同じ歳ぐらいで、安定した仕事に就いていた人は、そのまま日本語教員を続けていますが、若い人の中には現在は日本語教員をしていないという人もいます。ただ、それでも日本語教育関連の仕事をしていたり、それを生かした仕事をしていたり、いろいろなところで活躍しています。

林：「キャリア・パス」とか「ライフ・パス」という言葉が出てきましたが、国際協力のレポートとして、『現地と世界をつなぐ私たちの仕事』（2008）というのがあります。国際協力関係の仕事の人のパスがどうなっているかという、NGOとか、国際協力のために海外に出て、現地でハードな仕事をしている人たちは、不安定な部分があって、右往左往するんだけど、10年ぐらいすると、そのキャリアをもとに何とか落ち着く。日本語教育だけが不安定じゃないというのが、すごくわかります。その中に日本語教育も含まれていて、国際交流基金の日本語教育専門家が2人書いています。日本語教育もそういうキャリアの類で、若い人には専任の仕事がない時代には、外に行って、現地の教育問題に興味を持って、識字教育で大学院に行くとか、日本語教育で協力隊に行った後、開発途上国の教育問題で大学院に行き、そういう問題を扱う職に就くとか、最初から安定した仕事じゃないけれど、自分のやりがいをかけてやる仕事というふうに見られるんじゃないでしょうか。

日本語教育を通して世界とつながるような仕事をして、世界が日本を見る目を日本に持ち込んでくることもできる。

司会：キーワードになるのは「日本語教育でつなぐ」になるんでしょうね。

林：日本語教育で多様な人をつなぐというのが、国内にいても、外にいてもできるのですが、これから一般の人にもそれが見えやすくなるだろうと思います。ただ、これから社会全体の受け入れ体制が、整わないうちは「激動」になるかかもしれませんね。

司会：「激動」ということを考えると、学生を教育して送り出すと同時に社会人に対する啓発も重要になるかと思います。大養協として社会人に関わっていくというのは難しい面があるように思いますが。

林：でも、やったほうがいいんじゃないですか。大学の日本語教員養成課程は、今まで日本語教育、日本語学校など日本語教育機関に限って考えることが多かったんだけど、そこで見えてきたことを社会に還元するような大養協というのを考える。一般向けの何か。もしかしたら、卒業生の声をたくさん社会に発信していく機会にして、卒業生の声が日本語教育機関じゃないところで、社会にどう関わっているかみたいな声を、大養協としても発信する。日本語教員養成課程で学んだ学生が日本語学校のデータだけでなく、社会で何ができているかを大養協として把握するのは、キャリアにつながるんじ

やないですか。社会全体の受入れに貢献できるということが見えるようにする。

司会：社会教育，生涯教育につながるような日本語教育でありたいですね。

林：大養協は日本語教員養成課程をいかに作るか，運営するかが中心だった時代が長かったんじゃないですか。ほかの内容の時は集まりが悪くても，制度のことを扱うと人が集まるみたいな歴史がありました。そこがもうちょっと変わるといいかな。前回，すごく集まったんでしょう。それを広がり，深まりにできるといいなと思いますけど。

司会：キャリアという，何かピンとこなかったのか，参加申し込みが少なかったんですよ。大丈夫かなと思っていたら，間際になってどっと申し込みがあつて。

林：社会の動きもあつて，行った方がいいと思ったんでしょうね。

司会：時期的にいろいろなのが重なるから，どこに行こうかなと迷っていたのかもしれませんが。

林：メディアが日経新聞まで記事にするようになってきたので，これはと思った方が増えたんじゃないでしょうか。

岡本：NHKの朝のニュースとかでも取り上げましたからね。前には，帰国したブラジル人にも取材してました。

林：日経の一面にシリーズで扱うというのは，体制側から意図的に情報発信がなされたのでしょうか。朝日はもともと受入れ問題と言っていましたが，問題ではなく，もう今後こういう方向で行くよというような情報になってきたので，その方向に持って行くというのが見え始めたのかなと思うんですけど。

岡本：「推進法」も経済というところから日本語が必要だみたいなことになってしまわないようにして，この問題を上手に利用することだと思うんです。単に日本語教育というんじゃないで。SDGs といった持続可能な発展であるとか，トランスジェンダー，障害者など，だれもが安心して暮らしていけるよというときに，日本語教育が貢献できるという研究もある。文化庁の報告書にある知識・技能，そして態度。日本人は外国人とか，多文化とかに関して「意識」が遅れている気がします。いまだに日本人か日本人じゃないか，ウチかソトかみたいな捉え方になる傾向がある。

林：本当は「日本人」じゃない人といっしょに暮らしていたんだけど，いないものとして扱うような歴史が長かった。そのへんをどうするかですね。急に増えた，人が来た。でも，急にひく可能性もある。大勢の人がどっと来て，どっと帰るということを念頭に置いて動く。

多様性を重要視して，障害者を含む，トランスジェンダーも OK，女性も OK と言っているのも，クリティカルに疑ってみると，経済を支える人口が足りないの，何でもとにかく使えるものは使うというのが，何か見え透いているような気がします。

岡本：みんな社会を作っていくという方向に行かなきゃいけないのに，やっぱり効率的に安い労働力を得ることが先決みたいな。

林：こうやったら労働力をある程度確保できるので，この経済規模で行きたいというのが先にあるというのが，ちょっと危うい。本当にその人たちが心地よく暮らせることを念頭に置いた議論ではなくて，数を確保するというのが根っこにあると疑いつつ，でも好

機と捉えて、だったら整備しましょうという議論かなと思います。

日本語教育学会の理念を作るときに、社会に貢献すると言っても、社会自体がどうあるべきかを議論していない。過去には、気がついたら、戦争に加担していた歴史があるわけだから。その当時だって、必要だと言われて、社会に貢献してたんですよ。

岡本：戦後の日本語教育はその反省をもとに来ているはずじゃないですか。

林：深い反省よりも、ちょっと脇に置いてきてしまったかなって。

岡本：だから私は概論でも必須として、同化政策としての日本語教育の話をしているんです。

## 5. 日本語教育を通して変わる意識

司会：最近の若者には「内向き」志向の傾向が見られ、第3の鎖国時代だとも言われてますよね。立花隆が言ったみたいですけど。津田塾とか東京国際はかなり意識が高いかもしれませんが、世界のことに興味が無い若者が増えている。しかも、そういう人ほどマスコミに踊らされて、ステレオタイプ的な価値観を身に付けてしまいやすい。これから急増するであろう外国人住民に対する摩擦の原因になりかねない。日本語教育を知って、外国人と接したことがある人が、こういうときに頑張ってもらいたいと思いますが、いかがでしょう。

林：普通の学校教育の日常の中で、目を外へ向けるようにしていく。接することが一番ですよ。その接し方がよかったら、国の関係とは別の関係が持てます。

岡本：子どもたちというのはすごいですね。その人に興味を持つと、その国の言葉をやってみたいとなる。12月にも留学生が低学年のクラスに行ったんですけど、その人が子ども好きかどうかで違う。子どもはわかる。日本語が上手かどうかは関係なく、いっしょに遊んでくれておもしろいとかで、挨拶を教えてもらったら、覚えてるし、じゃんけんをいろんな言葉でやるんだけど、そういうのはずっと覚えていて、おもしろいらしいんですよ。そこが基本かなと。

留学生もそうですよね。留学生は小学校に行くのが好きなんです。おもしろいから、何回も行きたいと言うんです。自分の国にみんな興味を持ってくれるし、また来てと言われるから、何回も行っちゃうんです。自分のイメージが自分の国のイメージになるというのがわかる。それは留学生にとっても、いい経験になると思うんです。テレビではこう言っているけど、違うんだなみたいな。

林：そうそう。

三枝：こないだ中学校に留学生を連れて行ったんです。ほぼ90%中国の留学生で、あと、ベトナムと韓国等がいるんですけどと言って。でも、最初のご挨拶を校長先生が英語でしてくださって。

別の学校からは「生徒一人ひとりが一生懸命書きました」というお手紙いただいたんですけど、それが全部英語で。中学校ぐらいになると外国＝英語になって、留学生＝英語ができる人になってというステレオタイプなのかな。ただ学校訪問したときは、すいません、こちらのほう英語が苦手なんで日本語でコミュニケーションさせてくださいと



ということで、生徒と日本語で話をしてとても楽しかったと言ってました。中国人で初級のレベルの人は漢字でやりとりしたりとか。

岡本：前に市役所の方に何回か、留学生にいろいろな市のことについて教えてもらいに来てもらってたんですね。そういうときに、みんな英語を使おうとするんですよ。「英語じゃなくて、漢字を書いてください。その方がわかります」って。市役所のほうで、いい研修になった、いい研修になるから若手を送りますと言われてました。

林：留学生の漢字クラス担当の先生が留学生を連れて小学校に行き、小学校の外国語活動に参加したんです。前は本当に外国語活動だったのが、今は英語になっています。そこは英語教育の大学院出身者がアドバイザーに入っていて、協力してるんです。その人は日本語も履修していた人なので理解し合える。今回行ったのは、ドイツ、台湾、フィリピン、アメリカなどで、「英語ネイティブ」は1人だった。でも、小学校の先生は英語でやることを期待する。英語活動と称しつつ、そのアドバイザーはわかっているので、英語と留学生の母語でやる。英語活動だから小学生は簡単な英語で自己紹介するけれど、留学生は日本語と母語。媒介語には英語ができる人は英語で。日本人の学生もボランティアで入るので、どうしようもないときは中国語と英語ぐらいはできる人がいるので、つなぐんですけど。子どもたちは、その複数の言語が入り交じった状態で楽しくやっている。小学校の先生は、最初は英語にしてほしいって言ってたけど、でも英語が母語じゃない留学生も英語と日本語で一生懸命自己紹介したりするのを見ることで、子どもたちは多文化・複言語化していく。子どもたちには何語かはどうでもいいことになって、お姉さんたちとやりとりした記憶が残るっていうのがいい。そこを英語一本にしていくのもおかしな話で。そういう意味で英語の先生が開かれるというのが大切。でも、うちの場合は英語ははずせない。

司会：もともと英学塾ですからね。

林：多くの子どもにとって、英語は外国語の入り口ですね。英語の先生が、英語だけじゃないことを意識する人になっていくことは大事なので、英語の先生との協働作業は、ひとつやれることかなと思います。

岡本：英語の先生が外国語としての日本語もかねる。国語と両方。

林：国語とはなかなか難しいでしょう？「国語」と言いたくない子どもが国語の教室に座るわけじゃないですか。

岡本：国語の目標を見たら、どうしたらいいかなと思いますね。

林：英語の先生の方に柔軟な人がいて、日本語の先生といっしょにやるというのは実現しやすいんですけど。

岡本：今、川越市とは教員免許更新の協力をしてるんですよ。

林：そこに入れるんでしょ。

岡本：そうしたら、国語の先生の意識が一番高い。日本語ができない生徒の指導を頼まれちゃうそうなんです。国語の先生にお願いみたいな感じで。でもやってみると、うまく教えられないから、研修にいらっしゃる。そこが大事だと思うんです。国語の先生が来て、日本語教育は外国語教育だって。そうすると英語に近いでしょ。国語の先生がそれ

を意識するっていうのは、日本語を外国語として英語と並べて見る、そこが大事だと思う。

林：教員免許の更新の中に、公的に年少者日本語教育を入れていく。

司会：それ、義務化してほしいですね。

岡本：特別の教育課程が施行されているからね。

林：教職の課程の中に日本語教育を1つ必修の教養教育みたいにして入れるといいですね。

三枝：うちの教育学部にはないんです。もちろん文学部にはありますけども。小学校の先生はやったほうがいいですね。

林：全小学校の先生が日本語教育的な視点を持つと、子どもたちはずいぶん助かるじゃない。東京学芸大学の齋藤ひろみさんたちもそれを狙っているんだと思うけど。普通の教育学部の先生に日本語教育が教養として必要になるというのができればいいですね。文科省が教員採用にあたって考慮すると言ったのは、すごく大きかったし、第一歩。教員免許を取る学生がちょっと頑張って副専攻を取ろうかなというふうになるし。

三枝：教職と日本語教育の主専攻を取るとなると単位的には卒業までにたいへんですけど、それをやろうという学生は気持ちも強いですし、教員採用試験に合格していきます。

林：1科目でも、2科目でもいい。ちょっと日本語教育のことを聞いておくと、子どもの少し変わった行動を見たときに、ちょっと背景が違うかと思える。

でも、単位数が大変なんですね。おまけにキャップ制もできて、何単位までとか制限があると取りにくくなっている。一方で、マイナーとダブルメジャーを文科省が進めると言い出しているようなので、余力のある学生は2つやってもいいというふうになるといいと思います。

岡本：うちでは、日本語教育の科目をどんどん必修の専門科目に入れたんですね。卒業単位になるので、最終的には自然に必修科目が取れちゃうんですよ。それで、英語と社会と日本語を取った学生がいたんですよ。

皆：それはすごい。

林：もう一回、復活させた方がいい。日本語教育関連の記事が日経新聞の一面にあれば出していたら、課程を閉じたけど、置いとけば良かったと思ってる人たちがいないんでしょうか。今の動きの中で新たに作っているところがあるとも聞きます。

岡本：子どもの意識を変えていくっていうのは、小学校のときからやらないといけない。一般の日本の方々の反応は、大学院を出たときから今までぜんぜん変わりません。たとえば、「グローバル人材＝英語」と思い込んでいる人が多い。「仕事は何をしているのか」と聞かれ、日本語教育の仕事をしているというと「国語ですね」と言われ、外国人に教えてますというと「英語上手なんですね」とか「いろいろな言語ができるんですね」と言われる。この意識が変わらないのは何なんだろうと思います。

林：85年の十万人計画からスタートして、入管法が変わった90年、しかたなく日系の人に限って入れて、そこからいっしょに暮らすという状況がスタートします。それまでは留学生の日本語教育が中心で、帰国者とインドシナ難民はいましたけど、隔離されたようなところで教育をやっていたので。工業地帯に入ってきた日系人は、地域の団地に多

く住むようになり、その対応が試みられてきたけれど、一般の人は知らなかったかもしれないですね。

それがわっと広がると、多文化共生じゃなくて、多文化抗争、戦いになりかねない。数が少ないときは、博愛主義的かというと、サポートしましょうという空気なんだけど、まわりがほとんど外国人となると、どうなるかわかんないみたいなところがある。そういうのにまだ対応できていないのに、入れちゃっているかなという気がします。

司会：外国人の増加率は、地方の方が高いですね。去年は島根、鹿児島、熊本の順とか言うからびっくりしました。

林：地方の方が人が足りないから。

岡本：広島のカキも。

林：半分以上とか、二人に一人とか言ってませんでした？

司会：すごい勢いで地方は増えていますから。

林：しかも、技能実習と言いつつ、自分の国にカキはありませんという。技術移転できない。

岡本：おかしいよね。

林：もともと働きに、みたいな。そこはわかっているので、だんだん減らして、特定技能で、日本語も勉強してきなさいと。そんなに都合良くいくのでしょうか。

岡本：そうしたら、もう来ない。日本の中で日本語教育を、国の予算をつけてやるというふうにしなないと。

林：備えがあるから来てくださってというんじゃないと。

岡本：だって、来てもらうわけだから。

林：しかも、5年間は家族同伴はだめでしょ。

岡本：地方だったら、方言も入ってくるし、これが正しい日本語とか言ってたら何も対応できなくなる。そういう現状はどうなっているかというのは、大事ですよ。

林：日本人のコミュニティには入らないで、黙々と働いて、狭い寮かなんかに住んでというのだと、とても非人間的かな。

岡本：それは続かないでしょ。受入れ側がやさしい日本語で言える力をつけないと。

## 6. 「社会を築くことばの教育」を目指して

司会：大養協の会員募集ポスターには「社会を築くことばの教育」という言葉を入れてありますが、これから新しい社会を築くために大養協として、あるいは日本語教員養成課程としてやるべきことは多いのではないのでしょうか。最後に、日本語教育の使命、役割、できることなどについて語っていただければと思います。

林：「社会を築く」の「社会」がどのような社会なのかについて、もっと議論がほしい。違う方向の社会に貢献しては危ないので、どんな社会になることに貢献するのか。

司会：この点については、大きな議論をやったことがないので、どんな社会を目指すべきなのか、話し合いをしていかなければなりませんね。

林：これからはどんな社会であるべきか、それにどうかかわれるかという観点の議論が必

要。「いかに得するか」ではなく、「何ができるか」を考えるような会ができるといい。三枝：今やっている日本語教員養成でという点から考えると、文教大学では実習をたくさんやっているんです。6つ実施していて、国内もありますし、海外もあります。いろいろな教育現場で教育実習をしているんですけど、実習をしていると、教えるということにフォーカスしすぎてしまう学生がいる。教えることが社会とどうつながっているかとか、共同体の一員になっているんだということをもっと見せていかないといけないと、改めて思いました。林先生がおっしゃったようにどんな社会を築きたいのかまで持っていったらと思いますが、それはなかなか難しいとしても、社会を感じる養成ができればいいなと感じました。

岡本：長期的な視野でどんな社会に、というのが大事な点だと思います。日本の場合、政府を見ていると、長期的な視野のものが少ないなと思います。それが残念というか。たとえば、アメリカだったら、早くから出生率が2.0以下にならないように対策を取りますよね。日本ではそういうのがわかってても、問題が解消されないまま、今になって人が足りないとか言っている。言語学、言語教育をやっていると思うのは、以前は複数の言語をやった。それが今みたいに英語だけになるっていうのは、人間の持つ可能性をすごく狭めている。いろいろな考え方ができるようになるには、いろんな言語を知っているということが大事だから、複数の言語を学ぶ社会を作っていく必要がある。協力して社会を作っていくと、争いになる。相手を排除すると、結局は戦争みたいになってしまう。戦争にならないように、いっしょに社会を作っていくという観点から日本語を教えるとか、外国語を教える。単に教えるじゃなくて、学びつつ教える。それが英語の先生とは違う、日本語教員が得しているところだと思うんです。

林：相手から学べる。

岡本：相手から学んで日本語教育は発展してきた。外国人がどこを間違えるのかとか、文法以外のところも、水谷先生がおっしゃる「非用」の問題であったりとか、「適切性」の問題、文法的に正しいけど、違和感があるとか。日本が持っている価値観とか、世界観とか人と人の関係とか、いろいろな言語を学ばないと、わからない。自分の言語はどうなのかというのは、自分の言語や文化の中だけで見ていたのではわからない。違うものが入ってぶつかったときに、初めて見える。そういうのを子どもたちに日本語教育から提供できるんじゃないかな。円滑に、上手に、KYじゃなくて、ぶつかったらいい、そこで考えよう。そうじゃないと、実感としてわからないと思います。息苦しくなるとはじめて、空気がなくなったとわかるのと同じで、何かおかしいことがないと、自分にとって当たり前のもが見えないから。

林：日本人はぶつからないようにするという文化だったんだけど、ぶつからざるをえないんだしたら、それをどう乗り越えていくかということが必要ですね。

岡本：ぶつかって戦争になっちゃだめなんですけどね。

林：ぶつかりつつ、どう越えるか。

岡本：それを忍耐強くどう乗り越えるか、言葉を学び合うとか、いっしょに何かを作るとか、それが越えられる方法だと思います。

林：ぶつからないようにする方向じゃなくて、ぶつかってもいっしょに何とかする力というのが、これから必要なだろうなと思うんですけど。日本語教育学会で考えた地域日本語教育システムは国内のイメージなんだけど、世の中にはいくつも違うシステムがあるわけでしょう。世界的規模で考えられる。「内向き」志向を打開する術にもなる。

岡本：行き詰まったり、戦争になったりという環境になっているのは、英語とか西洋の考えに偏っているのが問題。やっぱりそうじゃない言語を持っている人たちが必要。英語圏の人は英語しか学ばない。その人たちにほかの言語を学んでいる人の方が、いろいろなことをまとめられるとか、解決できるとか、ネットワークを作れるというのを知らせるのが大事だと思う。それこそ複言語能力。英語は大事だけど、英語を複言語の中の1つとする。日本語教育は、観点を変えて、日本語がどういう言語で、どんな文化を背負っているのかを見るものとして捉える。日本語にしか訳せないような概念や見方はないか、日本で常識でも正解では違う非常識。自分も学習者の抵抗を経験して、変わってきた。そういう経験が大事なのでは。

司会：お話しいただいたようなことが学生に伝わり、学生が変わってくれば、学生を通じて社会も変わってくるんじゃないでしょうか。

林：たまたま、次の世代に引き継ぐ時期に来てて。

岡本：海外に行くのはちょっと危ないとか、自信がないと言っても、日本語教育をやったら、そこで異文化のことを学べるのは大きい。

林：ちょっと自信を付けたら、外に乗り出そうかと。知り合いができれば、そこへ行ってみたくなりますよね。

司会：長時間にわたって、本日はどうもありがとうございました。

## おわりに

言語教育は政治や経済の影響を最も受けやすい分野の一つとも言えます。座談会参加者も日本語教育に関わるようになった時期によって、キャリア形成の道や意識が違ってきます。また日本語教員養成課程は、実に幅広い分野を包含しており、社会貢献の道も多様であることがわかります。まさに多文化・多言語共生社会の最前線が活躍の場です。

日本語教育は将来の社会基盤を形成する役割を担っているわけですが、そこにはクリティカルな視点で常に自分たちが行っていることを見ていかないと、思わぬ形で利用されていたという場合も出てきます。当然のことながら、受講者の人生を大きく左右することになりますから、適切な判断力・分析力を身に付けさせる必要も出てきます。「激動」が予想される時代にあって、波浪に翻弄されることがないようにしっかりとした考え方、生き方を示していきたいものです。



【座談会で紹介された本】

- (1) 加納弘勝編 (2008) 『現地と世界をつなぐ私たちの仕事』津田塾大学オープンリサーチセンター
- (2) 小島進・藤原孝章編 (2017) 『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版
- (3) 三枝優子・高宮優実編著 (2012) 『かけ橋の石ずえ 日本語教師のライフヒストリー』文教大学出版事業部